

音楽科における学校ソングの創作を通して

石巻市立北上中学校

教諭 中澤 麻里

1 はじめに

2016年に国連でSDGsが採択されてから、世界各国でSDGsへの取組が進んでいる。特に地方におけるSDGsの重要性は高いとされ、持続可能な地域社会を築くためにはという視点で様々な取組が行われ始めている。また、これからの時代の変化に伴う学校と地域の在り方が地方創生において必要とされ、地域社会のつながりや支え合いの希薄化等による地域の教育力の低下や学校と地域の連携・協働の重要性が指摘されている。そして、子供たちの生きる力を育むためには、地域の人々と目標やビジョンを共有し、地域とともにある学校へと転換していく必要がある。しかし、どんなに大人たちが子供たちを取り巻く環境を整えたとしても、子供たち自身が地域や学校に目を向けなければ、本当の意味で地域とともにある学校を目指すことは難しいのではないだろうか。子供たちがどのように学校や地域を捉え、どのような思いを抱いているのか、その思いを真摯に受け止め、地域の中で子供たちが輝いてこそ、地域とともにある学校へと転換していくものと考えられる。

2 主題設定の理由

(1) 生徒の実態から

本校は全校生徒40名ほどの小規模校である。小学校、中学校が1校ずつの小さな町にあり、祖父母や曾祖父母とともに生活する昔ながらの家族の営みがある。しかし、11年前に発生した東日本大震災では、多くの住民が新天地での生活を余儀なくされた。現在、本校に通う生徒の多くは、高台移転で自宅を再建し、震災前からの家業である漁業や農業で生計を立てている家庭が半数を占める。生徒はとても素直で穏やかであり、学校全体の雰囲気も良い。毎月実施している生活アンケートでも、学校が楽しいと答える生徒の割合の多く、前向きに学校生活を送っている様子が見られる。

しかし、令和3年度に実施した学校評価アンケートの「私は、北上という地域に誇りをもっている」という項目において、一部の学年ではあるが否定的な回答

が多かった。その一方で、「学校は、地域のよさを取り入れた教育活動を行っている(努力している)」の項目では、肯定的な回答が見られた。学校では地域の学習を行っているが、そのことが地域愛を育むことにはつながっていないという現実を突き付けられた結果であった。この結果から、生徒が自ら地域を思い、行動する教育活動が不十分なのではないかという思いに至った。

(2) 学習指導要領音楽科の目標から

学習指導要領音楽科の目標(3)に「音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情を育むとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽に親しんでいく態度を養い、豊かな情操を培う。」と示されている。また、解説の内容の取扱いと指導上の配慮事項(1)ア「音楽活動を通して、それぞれの教材等に応じ、音や音楽が生活に果たす役割を考えさせるなどして、生徒が音や音楽と生活や社会との関わりを実感できるよう指導を工夫すること。なお、適宜、自然音や環境音などについて取り扱い、音環境への関心を高めることができるよう指導を工夫すること。」とある。音や音楽によって心を落ち着けたり、やる気を奮い起こしたり、喜びや悲しみを共有したり、一体感を味わったりするなど、音や音楽は生活や社会と密接な関わりを持っている。様々な音楽活動の中でも、創作はこれまでの経験や内面に沸き上がる感情を表現することができ、更には仲間とともに創り上げる喜びを味わわせることができると考える。また、音楽を媒介として、地域と関わりを持つことで、社会との関わりを実感させることができるのではないかと考えた。

以上、(1)及び(2)の理由から、研究主題を『「地域愛」「学校愛」を育む教育活動の展開』とし、副題を「音楽科における学校ソングの創作を通して」と設定した。

3 研究構想

(1) 目指す生徒像

・学校ソングの創作を通して、学校や地域を見つめ直

し自分の言葉（作詞）で学校や地域の良さを表現しようとする生徒

- ・他者の考えやアイデアを取り入れながら、学校ソングの完成に向け、仲間とともに試行錯誤する生徒
- ・完成した学校ソングを歌うことを通して、学校や地域を思う気持ちを高めていく生徒

(2) 研究仮説

生徒自身が学校や地域を思いながら言葉を紡ぎ、仲間とともに一つの歌に練り上げていく課程を経ることによって、歌に愛着が生まれるであろう。その愛着のある歌を歌うことにより、学校や地域に対する思いが醸成され、学校愛や地域愛を育むことができるであろう。そして、学校内外で発表する機会を設けることで、生徒の活躍や頑張りが認められる場が増え、自己有用間を高め、さらに地域の方々との新たなコミュニティを構築できるであろう。

(3) 研究対象と研究方法

研究の対象とするのは、令和3年度の全校生徒42名とし、音楽科の創作における授業実践である。全校での取組ではあるが、授業は学年（学級）ごとに行い、他学年での取組を授業の中で紹介しながら、少しずつ一つの歌に創り上げていく授業形態をとった。また、大きく分けて3つの柱で研究を進めた。

研究の柱1「学校や地域を見つめ直す歌詞づくり」

研究の柱2「言葉を生かした旋律づくり」

研究の柱3「創作した歌を地域に発信」

これらの柱を中心に授業実践を行い、全校生徒の取組の様子と完成した歌から、本研究の有効性について検証する。

4 授業実践

○研究の柱1「学校や地域を見つめ直す歌詞づくり」

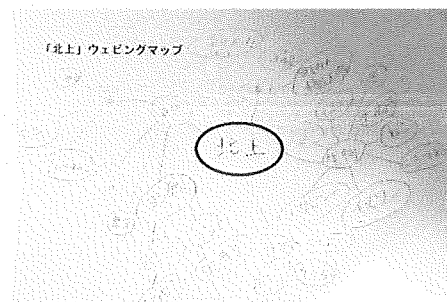
(1) ウェビングマップ（図1）の活用

どの学年も「北上」をマップの中心に置き、言葉を連想させていった。最初にこの授業を行ったのは3年生だった。3年生は1組13名、特別支援学級2名の15名での学年である。現実をしっかりと見つめることのできる生徒が多い反面、想像力や発想力が乏しい傾向にある。また、特別支援学級の生徒や外国籍の生徒も在籍しており、個別の支援が必要な生徒が多い。そこで、個人で考える時間を10分程度に留め、3人グループで言葉を出し合う協働学習を取り入れた。特別支援学級の生徒の「先生、結構良いのができました」の

声をきっかけに、他のグループの生徒たちも、それぞれのグループで挙げられた言葉の情報交換が自然と広がっていき、自分たちの力で言葉を生み出そうとする様子が見られた。3年生が挙げた全体的な言葉の印象としては、これまで北上で育ってきた思いや、今後この地を離れることを念頭においた言葉が多くあった。

「ぼくらの軌跡」「北上のかおり」「いつまでも忘れない」「共に進む仲間」などの言葉は、歌詞を構成する上で核となるものであった。

次に1年生で授業を行った。1年生は13名の1学級である。1年生はこの授業が初めての創作の時間になるため、創作が楽しいと感じさせることを第一に考えて実践した。あまり考え込まず、言葉をより多く挙げることを目標にして、ウェビングマップに書き込ませた。自然に目を向けた生徒が多く、北上に生息する「イヌワシ」や「シカ」、「タヌキ」、北上の名産である「ヨシ」や「ワカメ」、北上の名所などの具体的な言葉が多く挙げられた。また、地域の人々に目を向けた生徒もあり、素直な気持ちを書き表していることが1年生の特徴であった。



(図1: 1年生のウェビングマップ)

最後に授業を行ったのは、2年生14名の学級である。2年生は、どの分野の楽手にも大変意欲的に取り組み、真面目な態度で音楽の授業に臨む良さがある。しかし、既習事項にとらわれすぎる傾向があり、やや表現に硬さがあることが課題だと感じている。そこで、感情ことば選辞典を活用したり、タブレットで様々な歌詞を検索させて気に入った表現を探させたりしながら、多くの情報の中から自分のイメージする言葉を挙げさせるようにした。書き出すまでには時間を要した生徒が多かったが、「北上川の川面がきらきらしていることを表現したいのに言葉が見つからない」と発言した生徒がおり、近くの席の友人たちが一生懸命に言葉を選ぶ姿が印象的であった。最終的に、「川瀬まばゆい北上川」という表現に落ち着き、歌い出しの言葉として採用された。イメージしている情景や気持ちが端的に表

現できる面白さを知った生徒たちは、創作意欲が増し、「丘の上の学び舎」「響く笑い声」「笑顔広がる」など、学校生活における充実感について歌詞にしたいという思いが強くなっていったように感じる。

(2) 一覧表から言葉をつなげて歌詞づくり

この授業は、授業時数と進捗の関係から3年生のみが行った。「ひらめき単語一覧」(図2)を見た男子生徒が「もう少しロマンチックな歌詞があってもいいのではないか」と提案した。

「北中ソング」 ☆☆ひらめき単語一覧☆☆

川瀬まばゆい北上川 (の? に? を? は?)	一出だしはこれに決定したい!!!!
響く笑い声 さわやかなそよ風 水面がきれい ヨシの音カサカサ	
丘の上の中学校 伝説の神楽崎 釣石神社に守られて 波の音	
ヨシ原広がる北上川 ヨシ原に風が流れ込んでいる 寄り添う緑 桜雨ヒラヒラ	
一緒に過ごした時間 みんな家族のように 笑顔が太陽のように キラキラ まるで宝石のよう	
優しい町の人 川ゆるやかに 北中生の心もおだやか	
笑顔の数だけ未来がある まばゆい太陽	

(図2: ひらめき単語一覧)

「え〜」「きもい」などの言葉が上がる中、特別支援学級の女子生徒は、黙々と歌詞の創作に励んでおり、いち早く「先生、できました」と手を挙げた。それが、サビの部分に採用された「帰り道 見上げた空は」である。スクールバスで通学する生徒が多い中、彼女は徒歩で通学しており、下校中に空を見上げながら帰路につくのだそうだ。彼女の考えた歌詞を聞き、教室は一気に下校中の空の話で盛り上がった。部活動を終えて見上げる空は、ちょうど夕日で赤く染まっていることや、友達と話しながら帰る下校中がほっとできる時間であること、「また明日!」と手を振ることが日課になっていることなど、それぞれにエピソードがあった。ロマンチックな歌詞が欲しいと発言した男子生徒も「夕日」というキーワードが気に入り、全員でこの部分の創作に取り掛かった。こうして完成したのが後にサビとなる以下の歌詞である。

「帰り道 見上げた空に 赤く染める夕日が心を照らすよ 帰り道 見上げた空は どこまでも果たしなく続いている」

○研究の柱2「言葉を生かした旋律づくり」

(1) 言葉の抑揚を大切にしたい旋律づくり

中学校学習指導要領音楽科の各学年の目標と内容では、「表したいイメージと関わらせて理解すること」とある。第1学年では、音のつながり方の特徴について学習し、第2学年及び第3学年では、音階や言葉など

の特徴及び音のつながり方の特徴について理解できるようにすることをねらいとしている。言葉の特徴は、旋律を作るための手掛かりとなるもので、抑揚やアクセント、リズムを捉えさせることが重要となる。そこで、言葉の抑揚に合わせた旋律線を書かせ、その旋律線を基にして旋律の創作を行うことにした。本地域は、東北の訛りが強く、標準語とは異なるイントネーションで話すことが多い。そのため、言葉の抑揚を掴ませるにも、正しいイントネーションが分からず、苦戦している様子が見られた。しかし、このことは歌が完成した際の聴き手を意識している気持ちの表れであり、イメージしたことを正しく表現したいという前向きな気持ちからであったと考える。それだけでなく、正しいイントネーションはどこにアクセントが付くのか、普段使っているイントネーションは標準語ではなかったのかなど、生徒同士で議論している様子も見られた。

中学校1年生で学習する「赤とんぼ」(教育芸術者出版)は、言葉の抑揚を生かした旋律が特徴であり、このことを実感として捉えさせるために、創作の学習と並行して行った。2、3年生においては、学習したことを思い出させながら、「赤とんぼ」を参考にさせた。歌の多くは、必ずしも言葉の抑揚と旋律が一致しているとは限らない。むしろ、一致している歌の方が少ないかもしれない。言葉の抑揚と旋律が一致していることが、なぜ大切なのかを考えさせてみたところ、生徒の感覚と鋭い思考に感心させられた。以下は、生徒から出された意見である。

- ・聞いていて自然
- ・次の音程を予想できる
- ・音程が予想できると安心して歌える
- ・自然に強弱がつく
- ・情景がイメージしやすい
- ・音楽に流れが生まれる

(2) バーチャルピアノを使用している音探し

歌詞に旋律を付けるにあたり、一人に一台支給されているタブレットを活用した。バーチャルピアノは、ピアノの鍵盤が表示され、鍵盤をタップすると音が出る仕様である。言葉の旋律線を手掛かりに、歌詞や言葉のイメージから音探しをしていった。



(図4: タブレットを使って旋律を作る授業の様子)

この授業で、一番最初に旋律の提案をしてきたのは、普段の音楽の授業は、消極的な態度で授業を受けている男子生徒だった。単純な配列であったが、「帰り道見上げた空に」の旋律線に忠実に音が配置され、広がりのある旋律ができていた。提案を受けた生徒たちは、「ここがサビで決まりだね」と口々に言うほど、しっくりとくるものだった。一節旋律が決まると、音楽の方向性が明確になっていき、次々とイメージが湧いていく様子が見られた。また、音のイメージを持つことができても、実際に歌うとなると音域に無理があったり、言葉とリズムが合わなかったりと、予想していた以上に難しい場面も多々あった。しかし、曲が徐々に出来上がっていく過程のわくわく感や期待に満ちた生徒の表情は、これまでの授業では味わったことのない充実感に満ちたものだった。こうして出来上がった歌が「輝（ひかり）～ふるさとを照らして～」である。

「輝～ふるさとを照らして～」

川瀬まばゆい 北上川の 流れゆく街に 僕らは生まれ
川沿いに続く道はまるで ぼくらの軌跡のよう
波の音 寄り添う緑 ヨシ原広がる この街に生まれ
さわやかに吹き抜ける風が 僕らの思いを運ぶよう
丘の上の学び舎に 響く笑い声
笑顔の数だけ 未来がある
時に未来がすすんで見えても 共に進む仲間がここにいる
帰り道 見上げた空に 赤く染める夕日が心を照らすよ
帰り道 見上げた空は どこまでも果てしなく続いている
帰り道 見上げた空に 赤く染める夕日が心を照らすよ
帰り道 見上げた空は どこまでも果てしなく続ける
北上のかおり いつまでも忘れない

○研究の柱3「創作した歌を地域に発信」

10月に行われた文化祭での全校合唱で初披露した。その後、12月には北上総合支所のエントランスホールで、地域の方々を対象に披露した。この時、約80名の地域の方にお集まりいただき、温かい拍手をいただいた。



(図5：北上総合支所で披露)

また、卒業式でも全校で歌い、卒業生を送り出したり、今年度は集会時に歌うなど、大切に歌い継いでいこうとする生徒の思いを感じている。

5 成果と課題

(1) 成果

今回の学習を通して、地域「北上」と母校「北上中学校」を見つめ直すきっかけを与えることができたと思う。また、普段の何気ない日常や見慣れた景色の中にこそ、大切に守っていくべき価値があることにも気付かせることができたと思う。その成果は、授業者の主観によるものだけでなく、全校生徒で生み出した歌詞と旋律が物語っている。令和4年7月に行った学校評価アンケートの生徒の意見の中には、この「北中ソングをもっと地域で歌って学校をアピールしたい」という記述もあり、歌に愛着を持っていることが伺えた。また、「北上には魅力を感じない」と答えていた3年生の男子生徒は、将来公務員になって地域のために働きたいと夢を語った。地域の良さや地域の人々の温かさに改めて触れたからだ、その理由を答えていた。

一つの歌を創り上げる過程の中で、生徒それぞれが様々な思いを抱いたり、思い出したり、将来を描いたりしながら、地域や学校に対する思いが変化したことは大きな成果である。

(2) 課題

生徒の実態を学校課題として、全体で取り組めるように他教科との連携や完成後にどのように地域に発信していくかなどの見通しを持つことが必要であったと感じている。また、本取組はコロナ禍で合唱に充てていた時数を創作の時間に充てたために、できたものである。そのため、音楽科としての授業実践になったが、歌の活用については、生徒会や職員から意見をいただきながら、更に地域に発信していく方法を検討していきたい。

6 おわりに

これから子供たちが生きていく未来は、変化の激しい予測困難な社会である。しかし、どんな社会になろうとも、子供たちが愛され、大切に育ったという実感だけは残してあげたいものである。将来、生きにくさを感じたり、子供時代を思い出したりした時に、この歌と同時に、ふるさとの温かさを思い出して力強く生きていってほしいと願っている。